

共同生活型支援の効果に関するデータ検証

2018年5月

特定非営利活動法人 共同生活型自立支援機構

はじめに

2009年行政刷新会議事業仕分けで廃止になった「若者自立塾」であったが、一旦廃止にし、事業検証を行う予定であった。しかし、最大28か所あった「若者自立塾」を受託していた団体も経済的な面や職員の雇用問題等、24時間フルでの合宿支援を実施する体制作りの難しさ等で団体数も減少していった。また、効果検証も公的には行われず今まで来ている。現在はサポートステーション事業の中で「集中訓練」として合宿支援の事業形態は残ってはいるが、サポステを受託していない団体等は単独で補助金等に頼らず合宿支援活動を行っている。

また、最近の情勢として、詐欺的手法を用いて利用者に多大な負担をかけている団体や暴力や軟禁等による強引な支援活動を行っている団体もあり、従来の合宿支援とは程遠く、費用も法外な値段で行っている団体も少なからず存在している。

それらの団体と一線を画す為にも、また新たな合宿支援の芽を育む為にも共同生活型自立支援機構において、ルールや規約を作りガイドライン的な基準を設け、更には合宿支援の効果検証を行い、合宿支援とはどういった効果があり、また、どういった人たちに効果があるか検証をしてみた。

生活困窮者・生活保護者・虐待・児童養護・発達障害含めた障害者支援・ひきこもり・ニート等様々な困難を抱えている方々にとって合宿支援が一つの希望になるようデータを検証し、報告書として一助になれば幸いだと考えている。

基礎データ

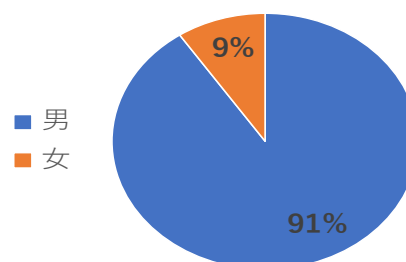
2017 年度に実施

調査対象は共同生活型自立支援機構に所属している団体において、2013 年～2016 年の間に合宿生活を経験した参加者のうち 85 人とした。

データ提供団体 5 団体

参加人数 85 名 男性 77 名 女性 8 名

* 男女比は約 9 対 1



★参加平均年齢

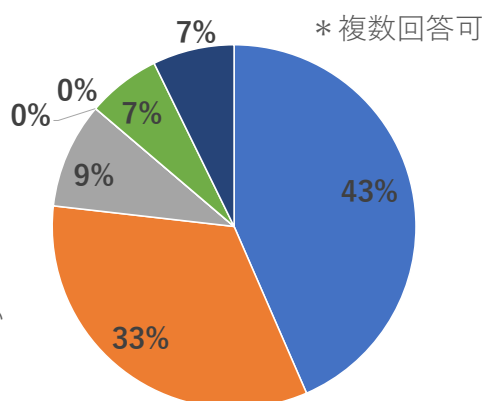
男性 23.4 歳

女性 26.8 歳

* 平均年齢は団体による差があり、平均 20 歳の団体から平均 30 歳までの団体が存在した。

★入所（入塾）目的（複数回答有り）

- 1、就職（自立）の為
- 2、生活リズムの改善
- 3、進学の為
- 4、児童相談所処置
- 5、むりやり
- 6、ひとのかかわりを持ちたい
- 7、その他



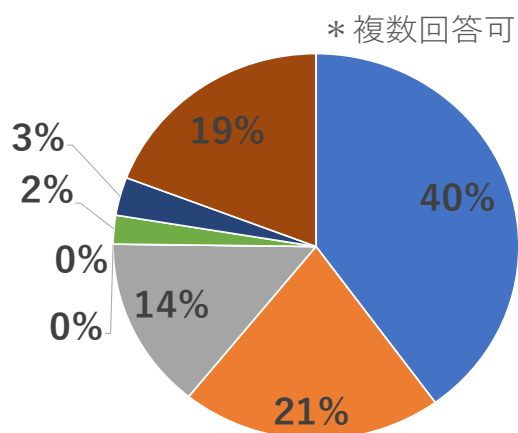
就職（自立）の為（43%）と生活リズムの改善（33%）が入塾目的の大半を占めている。団体による差は見られなかった。他には進学の為（9%）人との関わりを持ちたい（7%）等、が挙げられる。人との関わりを持ちたいという回答は親の希望による部分が多いのではないかと推察される

その他（7%）は生活保護者の受入による割合である。

いずれにしても、就職して自立したいという希望が強く、また生活リズムの安定は、自分では、なかなか改善が難しいのか合宿生活に期待している意識が見られる。

★入所前状態（複数回答有り）

- 1、ひきこもり
- 2、ニート
- 3、不登校
- 4、児童相談所処置
- 5、市役所要請
- 6、生活困窮者
- 7、生活保護者
- 8、その他

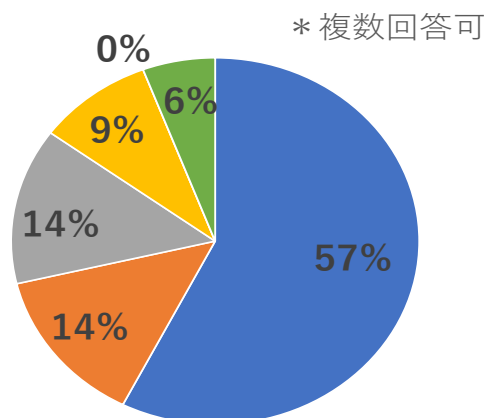


ひきこもり（40%）の経験者の割合が高い。特に不登校（14%）とひきこもりの重複割合が非常に高く9割を超える（不登校で外に出歩く不良系ではいと捉えられる）。またニート（21%）とひきこもりも重複した割合は3割代で、ニートのみの回答者は恐らく外には出られるが仕事をする気が起きにくい層だと思われ、サポステ利用者等が含まれていると推測する。いずれにせよ入所前の状態像はひきこもり状態が多くを占めていると認識出来る。その他（19%）では、他施設からや、身元引受の処置として等がある。少年院や刑務所等からの要請も若干あった。

生活保護者（3%）生活困窮者（2%）等は割合としては低いが、それらの支援を行っている団体ではその団体内で占める割合が3割弱に迫る数になっているが、逆にそれらの支援を行っていない団体は生活保護者や生活困窮者の受入はなかった。

★精神疾患の有無

- 1、なし
- 2、統合失調症、うつ、双極性障害等、投薬治療が必要
- 3、発達障害等
- 4、人格障害や依存症等
- 5、性同一性障害
- 6、その他

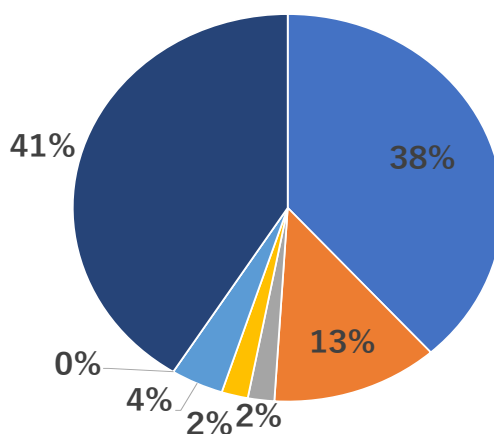


特に精神疾患を抱えていない若者が57%と半数を超えた。しかし、投薬治療が有効と思われる統合失調症・うつ・双極性障害（14%）、発達障害（14%）、人格障害依存症は見極めが難しいが（9%）、半数がなんらかの精神疾患を抱えていた。その他（6%）は強迫神経症がほとんどを占めた。回答はなかったが、性同一性障害もカミングアウトしなかっただけで見極められなかった可能性もある。

ただ、合宿支援のみで精神疾患が改善するとは考えられないが、症状が安定している状態での支援は可能であろうと思われる。また、ひきこもり経験の利用者で精神疾患が見過ごされ、支援最中に分かったケースもあった。

★家族構成

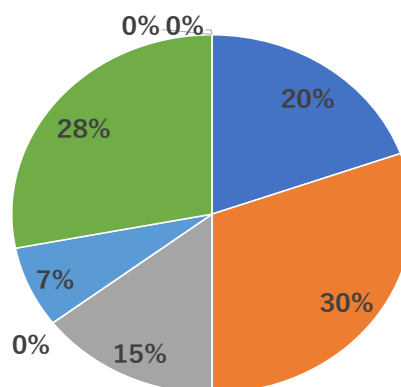
- 1、両親健在
- 2、母のみ
- 3、父のみ
- 4、祖父母同居
- 5、祖母同居
- 6、祖父同居
- 7、兄弟・姉妹がいる



母のみ（13%）父のみ（2%）等ひとり親家庭が15パーセントを占めた。

★学歴

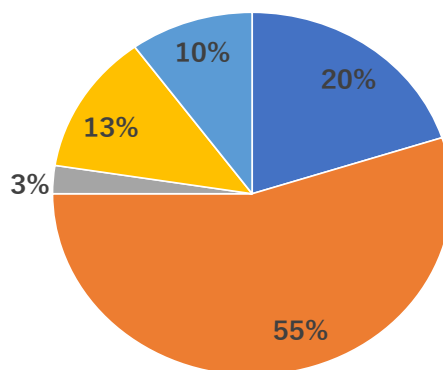
- 1、中学
- 2、全日制高校
- 3、通信・サポート校・定時制
- 4、高卒認定
- 5、専門学校
- 6、大学
- 7、大学院
- 8、その他



中卒（20%）のみの割合が高い。全日制高校（30%）通信制高校・サポート校（15%）となっている。大学（28%）となっているが大学を中退と答えた層が3割代を占めていた。大学院生は今回居なかった。

★合宿生活体験

- 1、なし（一切無い）
- 2、1週間以内（就学旅行など）
- 3、1か月以内
- 4、有る
- 5、その他



一切なし（20%）と全問の学歴が中学校だけの利用者の割合がそれぞれ20%と割合が一致している。学歴が中学校だけの利用者は不登校等さまざまな問題で宿泊体験（修学旅行等）を避けて行かなかったのかもしれない。また、合宿経験が有る（13%）利用者もいた。もう一度合宿生活を通じて自立をしたいという思いを感じられる。

合宿支援の効果検証

点数はスタッフが状態像を見極めて作成した。その中で効果が見込まれるものと見込まれないものの数値差異がある程度現れたと思っている。

*5段階評価でレベル1は劣る、レベル3は一般同年代水準、レベル5は高いで評価している。(レベル変化が大きくなるほど合宿生活効果は強いと考える)

状態レベル	
レベル1	・意思がない、意識がない、人よりだいぶ劣る
レベル2	・意思は多少見せる、意識が多少ある、持ちつつある、人より多少劣る
レベル3	・標準レベル、一般的な人と同じレベル(同い年の人と比べ)
レベル4	・意思多少高い、意識が多少高め、人より多少優れている
レベル5	・意思が高い、意識が高い、人より優れている

★生活習慣

		入所直後	現在	差
生活習慣	体力	2.1	3.3	+1.2
	食事	2.5	3.3	+0.8
	清潔感（髪や爪やニオイ等）	2.7	3.3	+0.6
	季節感等の有無（服装など）	2.7	3.3	+0.6
	清掃や片付けが出来る	2.2	2.9	+0.7
	時間を守る	2.3	3.3	+1.0
	生活リズムの状態（昼夜逆転など）	1.8	3.1	+1.3

体力（2.1～3.3 へ+1.2）、生活リズム（1.8～3.1 へ+1.3）、時間を守る（2.3～3.3 へ+1.0）などが差異1以上改善された。合宿支援の根幹の一つに生活リズムの改善がある。食事（2.5～3.3 へ+0.8）等も生活リズムの中に入ってくるだろう。差異1以上にならなかったのは偏食など偏った食事をとっている利用者も少なくない為だと推測する。

講義や作業や何らかの訓練プログラムを受け、脳や体を動かし、しっかりと食事を取り、疲労感を感じ、夜眠れるようになる。このような合宿生活を続けると、睡眠時間も適正な時間になり、早く起きることが出来る（時間を守る）ようになっていく。

合宿支援を行っている団体が一番大事にしている支援部分で差異がはっきりと出た。

清潔感（2.7～3.3 へ+0.6）、季節感の有無（2.7～3.3 へ+0.6）も標準点3以下から3以上になった。標準値3以上にならなかったのが、清掃や片付けが出来る（2.2～2.9 へ+0.7）と言う項目だ。+0.7で伸びているように感じるが、発達障害や長期ひきこもりの中で必要性を感じず、また、個人個人によって片付けの感覚が違う部分があるのではないかと推測する。

★コミュニケーション能力

		入所直後	現在	差
コミュニケーション能力	人混みに対する苦手意識	2.2	3.0	+0.8
	集団や人に合わせての行動	1.7	2.4	+0.7
	話の整合性	2.3	3.0	+0.7
	聞かれたことに対して適切な受け答えや返答	2.3	3.0	+0.7
	リーダーシップ	1.7	2.0	+0.3
	声の大きさ	2.4	2.9	+0.5
	アイコンタクト (目を合わせて話が出来るか?)	2.1	3.0	+0.9

リーダーシップ(1.7~2.0へ+0.3)は合宿支援を行っても数値的には伸びが非常に少ない。集団や人に合わせての行動(1.7~2.4へ+0.7)も差異としては上がっているが3の標準値には遠い。両方1.7からのスタートだが、数値以上の差異を感じる。声の大きさ(2.4~2.9へ+0.5)等も気質的な要因が強いと考えられ標準値3に届かなかった。

一方、アイコンタクト(2.1~3.0へ+0.9)等の数値は差異が大きかった。生活の中で、信頼関係が出来てくるとしっかりとアイコンタクトを取って、コミュニケーションをとる事が出来るようになるのではないかと推測する。

人ごみに対する苦手意識(2.2~3.0へ+0.8)も標準値3になった、合宿支援の中で生活を通じて人間関係の再構築を行っている中で人間関係に対する苦手意識や自分自身への過剰な部分が慣らされていくのではないかと推測する。

話の整合性(2.3~3.0へ+0.7)、聞かれたことに関しての適切な受け答えや返答(2.3~3.0へ+0.7)等も標準値3に上がった。

★職業に関する意識

		入所直後	現在	差
職業に関する意識	仕事への見方や意識、偏見	1.8	3.0	+1.2
	働く事に関してのイメージ	1.8	2.9	+1.1
社会常識	決断力(自分で物事を決める能力)	2.0	2.7	+0.7
	気遣い	2.2	2.9	+0.7
	当番等取り決め事への積極性	2.6	3.2	+0.6
	ルール・規則の遵守	2.8	3.3	+0.5

仕事への見方や意識・偏見（1.8～3.0 へ+1.2）、働く事に関してのイメージ（1.8～2.9 へ+1.1）はそれぞれ1ポイント以上変化している。共同生活型自立支援機構に加盟している団体の中にはサポステの受託団体や旧若者自立塾も多く、それ以外の団体も「自立＝メンタル面と経済的な自立」と考えている団体が多いので軒並み高くなった。出口の部分にも当たるので、個々の団体、スタッフ一人ひとりが意識を持っていると推測する。

また、団体によっては合宿生活を続けながら一般就労している利用者もいる。そういった利用者が有効なモデルケースになっており、就労にむけたスタッフ・利用者共にグループダイナミックスが良い意味で機能しているのではないかと推測する。

★社会常識

決断力（2.0～2.7 へ+0.7）など物事を決めるのに時間がかかる利用者が多いが、少しずつ決断し行動する力がついてくる、のではないかと推測する。また非行傾向や反社会的行動を取る利用者もそういった行動を取らないように自粛するような抑止力も合宿支援の中で育つのではないかという思いもある。

気遣い（2.2～2.9 へ+0.7）の変化については、ひきこもりだった利用者は急な合宿支援の中で気疲れる的な部分を見せる事もあるが、それを乗り越えて成長していく。過剰な気遣いを見せる利用者も多いが、適切な気遣いが出来るようになってくる。ただ、変化が見られない利用者も若干存在し、発達障害の利用者等は身に付きにくい部分があるのではないかと推測する。

当番等取り決め事への積極性（2.6～3.2 へ+0.6）、ルール・規則の遵守（2.8～3.3 へ+0.5）等は元々数値が高く、気質的に決められた事や規則の遵守等の意識はかなりある。全体的に合宿支援利用者の真面目な人間性が垣間見られる。

★自己肯定観

		入所直後	現在	差
自己肯定感	自己否定的感情の強弱 (本人の意識の中で)	1.8	2.6	+0.8
	自分を否定されるのが怖い (他人の評価)	1.9	2.6	+0.7
	失敗のイメージしか浮かばない (マイナス的感情)	2.1	2.8	+0.7
辛抱強さ (タフさ)	困難な場面に遭遇したらすぐ諦める	1.8	2.7	+0.9

自己否定的感情の強弱 (1.8~2.6 へ+0.8) は改善されているが、元の数値がほとんど1か2で非常に低く自分自身への評価が低く自信がない様子が見られる。合宿支援をして回復を見せているが、標準値3を上回れなかった。

自分を否定されるのが怖い (1.9~2.6 へ+0.7) 項目において、他人の評価を気にしすぎて動けない等があり、合宿支援の中で改善を見せていくが標準値3までいかなかった。

失敗のイメージしか浮かばない (2.1~2.8 へ+0.7) も、差異の変化が見られない層と大きく変わった層と別れた。マイナスのイメージを非常に強く持ち変化のない(過去の失敗体験の強い人)人もデータ上見られた。ただ、合宿支援により経験の機会を増やすとマイナス的感情も和らぐのではないかと推測する。

★辛抱強さ

困難な場面に遭遇したらすぐ諦める (1.8%~2.7%+0.9) 項目の変化の要因として根本的に合宿生活の経験自体が今までの生活(合宿経験なし 20%一週間以内 55%)に比べ我慢強くなる生活を強いられる部分にある。支援自体他プログラム等も含めた辛抱強さだ。これも大きく変動した若者とそうでなかった若者の差異があった。上がらなかった子は発達障害の疑いがある子が多かったのではないかと推測できる。

ただ、全体的には1に近い差異で上がっている。

支援終了時の状態

★支援終了時の状態

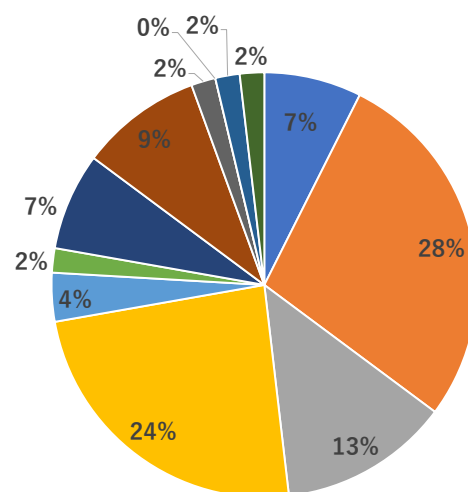
支援終了に至るまでの平均年月…8.7 か月。

若者自立塾やサポステ集中訓練の期間が3～6 か月。

アンケートを取った団体それぞれの期間が8.7 か月。

★現在の状態

- 1、正社員に決定
- 2、アルバイト決定（月収10万以上）
- 3、働く事が出来るようになった（月収10万以下）
- 4、進学決定
- 5、期間満了
- 6、病気により
- 7、脱走
- 8、親の強引な引き取り
- 9、規則違反により退所
- 10、年齢制限
- 11、他団体へリファー
- 12、その他

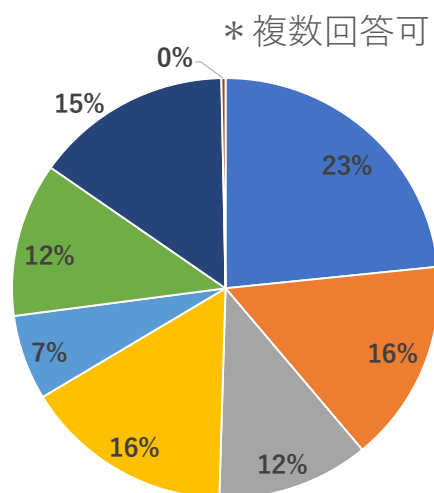


- | | |
|--------------------------|-------|
| ① 正社員に決定 | (7%) |
| ② アルバイト決定（月収10万以上） | (28%) |
| ③ 働く事が出来るようになった（月収10万以下） | (13%) |
| ④ 進学決定 | (24%) |

進路が決まったのが上記の①から④の合計で72%を占めている。団体によって進学、復学等が多くある所とそうでない所があった。就職した利用者は48%を占め全体の約半数いた。期間満了（4%）は他県から来て、家に帰り、その後の連絡が取れなかったケースである。病気により（2%）は合宿支援に来てから病気が発覚したケースで医療ケアに繋がった。問題は、脱走（7%）、親の強引な引き取り（9%）であり合計で16%を占めている。親の強引な引き取りの1件は経済的な理由ですが、他は利用者や親の理解が得られなかったケースだとも考えられ、大いに反省しなければならない。規則違反（2%）、他団体へのリファー（2%）、その他（2%）となっている。規則違反やリファー等団体によって利用者の合う・合わないがあるので、情報を共有しあいながら改善していきたい。

★合宿支援で良かったこと

- 1、生活習慣の改善
- 2、コミュニケーション能力の改善
- 3、職業に関する意識
- 4、社会常識
- 5、自己肯定観
- 6、辛抱強さ
- 7、環境の変化
- 8、その他



生活習慣の改善	(23%)
コミュニケーション能力の改善	(16%)
職業に関する意識	(12%)
社会常識	(16%)
自己肯定観	(7%)
辛抱強さ	(12%)
環境の変化	(15%)

入所の目的で生活リズム改善 (33%) 2 位、合宿支援で良かった事の生活習慣の改善 (23%) 1 位と期待して入り、良かった点でもマッチングしている。

他は全て同じくらいの数値が出ており、全体的には合宿生活について肯定的な意見が多かった。

まとめ

効果検証参加団体数、アンケート数共にもう少し数が欲しかった。継続してデータを積み重ねて行きたいと考えている。

また、各団体共に特色が大きく出ている。

基礎データの中では

年齢層で、若者（10代20代）が多い団体と、年齢が高い団体（30代40代）特色が出てきた。

生活保護・生活困窮者も行っている団体は1つだけでその団体で占める割合は3割弱であった。他の団体では生活保護・生活困窮者の支援は行っていなかった。若者自立塾が無くなり、生活保護や生活困窮者の支援まで行っている団体とそうでない団体の差が出てきている。生活困窮者・生活保護者は自力では合宿支援に到達できない事が浮き彫りになった。唯一行っている団体も地方自治体との契約でその地方で発生した事案でしか利用が出来ないようにしている。

合宿支援の良さは全国様々な地域から利用できるのが良さであり、地域・地域で活動支援を見守る事が主流になっているが、支援した人の中には地元以外の地域で人生をやり直したかった利用者もいる。そういった方々を全国から利用できる手立てはないだろうか。模索していきたいし、行政側も考えていただけないかと思う。

また、病気の有無でも、8割方無し、と回答している団体と、4割と答えている団体、2割程度と答えている団体とで差異があった。診断名を受けている、受けていないで差が大きく変わって来る。その辺りを統一した方がデータとして信憑性が高くなるので、次回は留意したい。

他は共通する所が多く、入所目的（就職（自立）・生活リズムの改善）入所前状態（ひきこもり・ニート・不登校・その他）等どここの団体も同じような割合だった。

全体として中学卒のみが2割と非常に高い数値であり（H29年文科省学校基本調査では中卒後高校進学率は99%）また、大学中退率は3割を占め、サポート校卒業も15%いる。挫折を経験した人たちのリトライの場所にもなっている。また一人親家庭の利用者も15%おり、経済的に苦しい中、費用を捻出しているのではないかとも考えられる。潜在的な生活困窮者層だ。

効果の検証

検証方法として、過去のデータ（2013～16）を抽出したので、スタッフの目線でのデータになっている。

合宿型支援の目的は自立（就労）であり、その為に生活リズムを改善し、社会生活が送れるよう時間を順守し、その中で体力が向上していく。これは各団体共に顕著に表れた。そうやって生活を含めた支援をしている中で、簡易なグループワーク（主に食事準備や清掃等）を通じてコミュニケーション能力の向上が望まれ、年代を超えた交流が出来、これまでの生活に比べ辛抱強くなり、その中で社会常識を少しずつ身に付けていく。

ただ、リーダーシップ育成まではいかず、支援を受ける塾生の気質的な部分の現れだと思われる。合宿支援のスタッフの中には利用者からスタッフになった人もいるが、それはたまたま、リーダーシップが取れる利用者たちに声をかけスタッフとして採用したのかどうかを聞き取りしても面白い（私の団体はそうでした）。

また、気質的には生真面目で、ルール順守の人達が集まってくる傾向があるのではと推測される（元の数値が高い「当番等取り決めへの積極性」や「ルール・規則の順守」）。

自立援助ホーム等、他の合宿との差異を調べたいと考えているが、筆者の推測だが恐らく、合宿型支援を利用したニート・ひきこもり気質を持った人たちの大半の気質なのではないかと思われる。

支援終了時

支援終了まで8.7か月で72%の利用者が進路を見いだせた。それ以外で問題は脱走や親の引き取り等合わせて16%。どうしても合宿支援とはこれまでの生活に比べ不自由が多く、逃げたり親に引き取らせたりするケースは皆無にはならない。ならないが、その辺りを利用者や親に対して丁寧にしていかなければならないと痛感する。

良かった点としては全般的に色々な項目が挙げられていた、偏らず色々な点で効果があったのではと思われる。

生活リズムの改善と職業意識の目覚めに大きな効果

東京大学社会科学研究所教授

玄田 有史

困難を抱える若者に対し、長年、共同生活による合宿形式の自立支援を行ってきた複数の団体が集まり、支援の効果の検証に取り組んだ。その第一弾が、本報告だ。

リソース（資源）は、合宿生活を経験した 85 人の貴重な記録である。政府や研究者による「ひきこもり」の検証が、実際のところ、数人程度に対象が限定されていることと比べても、100 人に迫ろうとする人々のデータには一定の説得力がある。

対象者の多くは、就職のきっかけをつかむことと並んで、生活リズムの改善を目的に、家族のもとを離れ、合宿に参加してきた。ほとんどが一週間以上親元を離れた生活をしたこともなく、参加には少なからず勇気を必要としただろう。半数以上は、ひきこもりやニート状態からのスタートであり、4 割強がなんらかの精神疾患も抱えている。

さて問題の合宿支援の効果検証だ。当事者の自己評価ではなく、支援スタッフによる評価であり、入所直後からの各自の状況の変化が客観的に指摘されている。なかでも改善効果が顕著なのは、当初の目的どおり、昼夜逆転などからの生活リズム（習慣）の改善だ。体力アップや約束の時間を守ることなど、一時的な通所ではなく、ともに生活する大人がいるからこそその効果であることは、疑いない。やさしくもあるが、ときにきびしさを隠さない支援のプロである大人が周囲にいて、日々見守ってくれていることは、家族だけでは難しい対応を可能にしてくれていることがわかる。

地域などで働く他者との自然なかかわりもあってか、職業意識の芽生えや目覚めに対しても、合宿支援は大きな改善効果を持っているようだ。実際、人並みに目を見て話せるようになったり、人込みの苦手意識を徐々に解消することを通じ、支援終了後に 7 割以上が就職や進学などの進路を実現している。ここからは、合宿支援が、数字にも表れるような明確な効果を持っているといえるだろう。

無論、合宿支援にも課題はある。リーダーシップの発揮やみずから進んで当番の取り決めを行う積極性にまでは、多くは至っていないようだ。もともと受け身がちなこともあってか、自己肯定感や辛抱強さについても、同い年と同程度に達したとは本人たちも感じていない。脱走や親の強制的な引き取りなど、合宿支援が功を奏さなかった場合が少なからずあることも、報告では正直に語られている。これらの改善への粘り強い取り組みも今後求められる。

ただ、そうはいっても、当事者ならびに関係者の証言として集められた本報告は重要だ。今後も、データの蓄積を地道に持続していく他、合宿型支援を行う団体の一層の結集によって、実践的な好事例を広く社会に発信してほしい。そのためには、効果の評価についてのより客観的な尺度の作成のほか、本人、家族、支援者、地域関係者などの個性的な生の声を組み合わせで紹介していくことも、いっそう説得的なメッセージになるだろう。